

令和7（2025）年度

俳句講座 句集

— 第6集 —

講師 倉科繁登先生
(長野県俳人協会顧問)

塩尻市中央公民館

目次

未来	清水	勝子	1
卒業	山崎	政子	3
鳥渡る	五条	さと	5
蛍袋	掛橋	庸子	7
ひかり一点	長	泰裕	9
蛍火	檸檬		11
梅一輪	成瀬	綾子	13
旅立ち	中島	ゆき	15
はこべ	かやの		17
青空	宮腰	征彦	19
82歳の四季	飯田	正孝	21
草の餅	塩原	しほ	23
息	大鳥	由嵩	25
手習ひ3	カツヒコ		27
初句会	青柳	信雄	29

未来

その一

清水勝子

黄水仙咲きて日向の影放つ

てのひらに未来がはなつむ一年生

なてせ
え声開
控産はり

大地より海の音する麦の秋

星まつり絵筆の色を足しにけり

水押して川のぼりゆく山女かな

未来

その二

清水勝子

耳二つ色なき風に洗はるる

稲架かけてでこぼなてせこの影生でにけり

え声開
控産はり

一握の湖に秋光ただよはす

余生まだ未来あるらし初日記

餓鬼大将肩から先に卒業す

卒業

その一

山崎政子

控えめな産声しては開花せり

しやぼん玉吾の目を連れて遊びをり

なてせ
え声開
控産はり

天を突く穂先鋭き麦の秋

あやめ咲く浮かぶ地球の色を成し

バーベキュー蟻にんまりと笑ひをり

卒業

その二

山崎政子

草花の身じろぎもせぬ終戦忌

木枯や叫ぶ笛の音誰ぞ吹かむ

なてせ
え声開
控産はり

煮え立ての冬至南瓜に光あり

雪しまく音無き街の赤信号

卒業や発車のベルのけたたまし

鳥渡る

その一

五条さと

おとめ座のスピカ探しぬ夜半の春

遠き地へ行きし幼犬春隣

なてせ
え声開
控産はり

指の節固き戸のごと梅雨に入る

天の川ペルシャの空にたなびけり

言の葉の海を旅する夜長かな

鳥渡る

その二

五条さと

旅の途に未知の我あり鳥渡る

木の実落つ夜の静寂を聴きにけり

なてせ
え声開
控産はり

裸木や災まがの孤独に寄り添ひぬ

冬の星神々のうた響かせり

ラケットを鞆に収め卒業す

蛍袋

その一

掛橋庸子

木曾谷の空の狭きよ天の川

胸の内蛍袋に打ち明けり

なてせ
え声開
控産はり

ドレミファを奏でて青し釣鐘草

稲架掛けの長き横棒担ぎゆく

目覚ましの響き染み入る霜の朝

蛍袋

その二

掛橋庸子

山々の神も聴き入る除夜の鐘

降る雪や平和まだかなてせとちひろ問ふ

え声開
控産はり

峠より諏訪湖果て無き初景色

新雪や手のひら深く吸い込めり

頬を刺す風凜として卒業す

ひかり一点

その一

長泰裕

伸う伸うと春眠の淵出入りする

全山のひかり一点なてせ若楓

え声開
控産はり

いにしへの空へ木曾路の夏燕

対岸に河童も居りぬ夜釣りかな

死に切れぬ命も唾ふ蟻の列

ひかり一点

その二

長泰裕

秋蝶の風にたゆたふ薄さかな

谷風の千の野菊を愛でて居り

なてせ
え声開
控産はり

鳥海山錦秋照らす日は海へ

日溜りを生死よこぎる冬の蜂

木曾馬の呼気の白さや山眠る

蛍火

その一

檸檬

蒼天に戦火消えざる麦の秋

夏の月高天原の闇を刺す

なてせ
え声開
控産はり

空爆を星屑にして天の川

蛍火や命の軽き星に住む

沖繩忌絵空事めく事多し

萤火

その二

檸檬

夏終はる美ら海渡る優勝旗

地球より命は重なじきりぎりす

なてせ
え声開
控産はり

K2は静かにそびゆ雁渡る

登高や天のはしごを登り初む

うすらひや日の丸ゆれて蒼窮へ

梅一輪

その一

成瀬綾子

ピョコピョコと小人の走る麦の秋

手習いの我の自慢の白桃画

なてせ
え声開
控産はり

活き活きと命つなぎて目高の子

松代の和平の学び栗おこは

ワイン色の無花果ジャムや母の味

梅一輪

その二

成瀬綾子

びゅんびゅんとライン飛び交う天の川

生き物の縄張りなてせ困えひ山眠る

控産はり

稚児稚児のおうむ返しや初舞台

福寿草陽のスポット浴びバレリーナ

よく咲いたね梅一輪に缶チユウハイ

旅立ち

その一

中島ゆき

小さき手の赤飯重し入学子

麦秋のうねりの中に立ちつくし

なてせ
え声開
控産はり

あやめ笑む群青色の雨上がり

美ヶ原の雲の峰より降る校歌

夏草の線路の先の曙光かな

旅立ち

その二

中島ゆき

紫苑ゆれ旅立つ背の見え隠れ

霜降る夜出づる命と逝く命

なてせ
え声開
控産はり

寒晴やスイッチオンの白湯飲みし

時雨虹薄暗闇に消え入りぬ

すれ違ふ季節の中を卒業す

はこぶ

その一

かやの

入学の親子をつつむ光の輪

億光年世をつなぎたり天の川

なてせ
え声開
控産はり

土けぶり鉢盛の喜雨屋根たたく

ナナハンは夕焼け空にすい込まれ

間引菜をパツとはなして湯気のなか

はっぴ

その二

かやの

豆叩きポンポンはねる御座の上

初雪や目には見えねど頬で解け

なてせ
え声開
控産はり

初日の出木立ちをぬける千の糸

へばりつけはこべら叫び天仰ぐ

残雪のアルプスを背にマルチ敷く

青空

その一

宮腰征彦

陽気なるハローの声に桜餅

旅人が雨つれてきてなてせ杜若

え声開
控産はり

短冊の願ひかなえて星迎え

朝はやく腹を見せたる蝉一匹

夏帽子ドジャーズマークあまたなり

青空

その二

宮腰征彦

嵯峨菊の七・五・三仕立て見事なり

十月も二十日となりて色づけり

なてせ
え声開
控産はり

煩惱は消しがたきもの除夜の鐘

空風腹式呼吸二、三回

雪女音もせずして襟元へ

82歳の四季

その一

飯田正孝

新入生ともだち百人つくろうね

背^{せい}比^なべ^てあ^せや^せめ^せ一^な列^て凜^せと立^つつ

え声開
控産はり

天の川みんなでつかむ富士山頂

列離れ逆走の蟻あえぎ来る

今年米値札見つめて手を止める

82歳の四季

その二

飯田正孝

菊花展褒めあう二人知らぬ仲

霜晴やラジオ体操二十人

なてせ
え声開
控産はり

除夜の鐘喜怒哀楽の音重ね

初夢や終わりおぼろで二度寝する

まちあかり
街灯ふんはり包む細雪

草の餅

その一

塩原しほ

草の餅母は大きく作りけり

花菖蒲膝の高さでひと並び

なてせ
え声開
控産はり

今年米まづ仏壇の父母に

銀杏落葉一夜で廃園埋めつくし

針めどに糸のスムース小春かな

草の餅

その二

塩原しほ

雨戸閉づ今日も木曾口雪模様

軒先に薪高くあり寒の風呂

なてせ
え声開
控産はり

寒林や病みたる夢を昨夜見し

深雪や屋根を通路に郵便屋

雪の道辿りて行けば雪の河

息

その一

大鳥由嵩

引き出しは一年生の楽器なり

麦の秋強く柔らかき手の平

なてせ
え声開
控産はり

バス待ちと共に揺れたる菖蒲かな

反対の方から見たい天の川

船に蟻太平洋のど真ん中

息

その二

大鳥由嵩

三人の神経標本如き菊

初霜やジャクソン・ポロックなる草原

なてせ
え声開
控産はり

一服の煙を揺らす除夜の鐘

雪解川電話のチェロのピツイカート

卒業や踵を今日は潰さない

手習ひ3

その一

カツヒコ

踏まれつつじつところらえて麦の秋

そよかぜに善事のせくるあやめかな

なてせ
え声開
控産はり

野外映画やみにきらめく天の川

袋あけホッと新米このかをり

紅葉して神は今ごろ出雲かな

手習ひ3

その二

カツヒコ

静けさや山野をわたる除夜の鐘

初釜や晴れ着に紅なてせをうすくさし

え声開
控産はり

遠つ山ほのかに映す雪明かり

卒業を祝ふ青空高ぼっち

入学や紙カーキ色のランドセル

初句会

その一

青柳信雄

どきどきがわくわくになる一年生

麦秋や帰途に出逢ひなてせじ贈りもの

え声開
控産はり

「ひまわり」も「きぼう」も渡る天の川

七夕のエンジェルナンバー夢かなふ

日々見るも一期一会の蟻の列

初句会

その二

青柳信雄

稲穂波浮かぶ頭の子らが刈る

トパーズのごとく艶やかなる熟柿

なてせ
え声開
控産はり

銀杏散るばさばさばさと瀧になり

「初」の付く句が並びをり初句会

喝采のトンネルくぐり卒業す

おわりに

塩尻市中央公民館俳句講座の句集第六集ができあがりしました。一年間の講座のまとめとしての句集です。

私は、俳句を学び始めて三年が経ちますが、毎月三句を詠むことの難しさを痛感しております。そのような中、皆様に句を選んでいただき、倉科先生から温かく、ときには厳しく評価をいただくことが、私の大きな支えであり、意欲の源となっております。

皆様の句にふれるたび、表現の奥深さに感銘を受けています。また、日々の情景や事柄をどのように句に仕立てるか、その着眼点のすばらしさにも多くの刺激をいただいています。

この句集が、受講生の皆様の足跡をしっかりと残すとともに、お互いに学び合える、そんな句集にしたいと思います。そこで、来年度、講座の中でこの句集を活用していきたいと思っています。

本講座の講師倉科繁登先生には、一句一句について丁寧にご指導いただきました。その成果がこの句集に集約されています。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和八年 三月

塩尻市中央公民館長 青柳 信雄

俳句講座句集 (令和7年度)

第6集

令和8年3月31日 発行